
守護の英霊の物語

緋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護の英霊の物語

【Nコード】

N4812R

【作者名】

緋月

【あらすじ】

世界によって創られた英霊は、何のために生き、何のために戦うのか。守護の英霊は戦いを通じて何を得るのか……

※この小説はオリ主が原作ブレイクする可能性があります。

プロローグ（前書き）

初作品です。

よろしく願います。

プロローグ

??? side

私は、いつまで使命のために戦い続けられたいのでしょうか？

それに、世界はなぜ私を創ったのでしょうか？

本来ならば、私という存在はあってはならないモノだというのに。

……いや、そんなことはもうどうでもいいのだ。今となっては詮無きこと。

今はただ、私に課せられた使命を全うするつもりでしょう。

……おや？ 何かに引き寄せられているようだ。

この座から呼ばれるとすると世界の危機、もしくは契約による召喚だろうか？

まあどちらにしても、全力を尽くすだけだ。

情報が、流れ込んでくる。

――

これは……聖杯戦争？

なぜこのような戦いに私が？

「…………まあいいでしょう。私は、マスターを守っていればよいのですから。」

「さあ参りましょう、私のマスターの下へ。」

「……………」

「どうやら私は無事召喚されたようだ。」

「召喚された場所は倉庫の中、床に魔法陣が描かれている。」

「その近くには赤毛の少年少女が座り込んでいてこちらを呆然と見つめている。」

「レイラインから察するに私のマスターは少女のようだ。」

「……………っと、マスターに確認をとらなくては。」

「サーヴァント・セイヴァー召喚に従い、参上した。……………問おう、貴女が私のマスターか」

プロローグ（後書き）

勢いあまって書いてしまったorz

何とか続けて行こうと思いますので。

それでは！

プロローグ2（前書き）

続きます。

どうぞ！

プロローグ2

??? side

(どうしよう? どうやったらアイツから逃げられるのかな?)

突然だが私は、いや、私たちは追われている。

どうしてこうなったのかわからなくなったので思い返してみる。

—
—
—
—
—
—
—
—

私は学園から帰るときに双子の兄が弓道場の掃除をしていたので、無理を言って手伝っていた。

今思えばこのときさっさと帰ってしまえばよかった。

そうしたら私の日常は、平穩のままでいられたかもしれないのに、私は関わってしまった。

――魔術師たちの殺し合いに。

掃除を終えて帰るとき、ふと、金属音が聞こえた。

まるで武器と武器をぶつけ合ったような音。
――

（校内には誰も残ってなかったはず。だとしたらいったい何が？）

双子の兄も気になったのか、音のしたグラウンドの方へ足を向けたので、私も着いて行った。

「士郎。いったい何があるのかな？」

「俺にもわからない。けど、行かなきゃ何があるのかもわからないからな」

確かに、行かなきゃ何もわからないけど、嫌な予感がする。

知ってはいけない何かがあるような、そんな予感がするのだ。

フェンス越しにグラウンドを見ると、二人の人影が見えた。

一人は青い服装で、朱い槍を構えている。

もう一人は赤い外套を纏って、二本の剣を携えている。・

辺りが殺気で満ちていることから、あの二人が敵同士だということがわかる。

突然、槍を持った方の殺気が膨れ上がる。

その殺気にあれは危険だと本能が警鐘を鳴らす。

獣のような殺気が辺りに撒き散らされ、槍による必殺の一撃が繰り出されようとしている。

これで決着がつくと思ったそのとき――

――パキッ！

突然、小枝を折った音がした。

すると、殺気が私たちに向いてきた。

すぐに私たちは脇目も振らず逃げ出した。

本能で理解していた。

――
――
――
―― 私たちは殺されると。

――
――
―― 私たちはあの槍で貫かれて死ぬと。

私たちは校舎に足を向け、必死に走った。

しばらく無我夢中に走って、速度を緩めた。

「ここまで来れば、大丈夫・・・か？」

「たぶん・・・ね」

ここまで来れば、と。私たちは緊張を緩めていた・・・・・・・・けど

「よう、随分と遠くまで走ったじゃねえか」

私たちは死に神に死刑宣告を受けたかのように固まってしまった。

「悪いが、見られたからには生かして帰せねえ。せめてもの手向けだ、苦しまねえように一突きで殺してやるよ」

槍を持った男はそう言って、私たちの心臓を突いた。

血が溢れ出し、虚脱感に襲われる。

そして私の意識は暗転した。

— — — — —

「お・っ! し・っ!」

— ー ん ん う、静かにしてよ。

「お・し・ん! おき・っ!」

— ー う る さ い な あ、眠いんだよ。

「早く起きろっ!! 紫苑っ!!」

「うひゃあっ?!」

「うおっ?!」

慌てて起きたため、私は士郎とぶつかりそうになった。

「ごめん! ……って、あれ? ここって学校?」

どうやら私たちは廊下で寝ていたようだ。

「あれ？　そういえば私、心臓を貫かれたはずなのに、生きてる？」

「ああ、よくわからないけど、俺たちは生きているらしい」

「ねえ、さっきのって夢だったのかな？」

「俺はそう思いたい」

そう、あんなことは夢だと思いたい。

だが、制服についた血があれば現実だと物語っていた。

「とりあえず、帰ろっか」

「そうだな。いつまでもここに居るわけにはいかないし」

まず私たちは家に帰ることにした。

道中、私たちは無言だった。どっちも頭の中で整理できていなかったからだ。

家に着くと私たちは落ち着くために居間に入った。

すると、違和感を感じた。

父の遺した結界が働いたのだろう。

だとすると、――――

――――侵入者だ!!

異常を感知した私たちはすぐに身近にある物を手に取った。

手に取ったのはポスターだったが、ないよりはマシだ。

それに私たちは魔力を通し、強化の魔術を使用した。

不意に悪寒が走り、すぐに私たちは転がった。

私たちがいた場所には槍が突き立っていた。

「ほう、案外いい勘してるじゃねえか」

そこにいたのは、さっき自分たちを殺した青い槍兵だった。

「ったく。一度殺した奴を二度も殺すハメになるとはな」

「じゃあな。今度は迷わず逝けよ」

槍兵は赤い槍を繰り出すが私たちのポスターがそれを弾いた。

「なにっ?!」

槍兵の顔が驚愕に染まる。

「なるほど、物体に魔力を流し込んで強化したか……。そうか、
デメエ等魔術師だな」。

だが、それはすぐに掻き消えた。

槍兵の顔は瞬く間に戦士の顔へと変わった。

これで奇襲はできない、いや、元よりそんなものが通用する相手ではなかった。

それに、例え強化をしたとしてもポスターではすぐに限界がくる。

土蔵に置いてある木刀までどうやって辿り着こうか考えを巡らせる。

士郎と目線で頷き合い、槍兵の槍を全力で防ぎながら行くことにした。

頷くこと数秒、突然槍兵が動き出した。

放たれた槍を防ぐが、すぐに弾き飛ばされる。

弾き飛ばされた私の体は窓を突き破り、庭へ沈んだ。

士郎もすぐに槍兵に弾き飛ばされて来た。

私は追撃に備えるように立ち上がった。

槍兵の槍と打ち合うが、数撃耐えるのがせいぜいだった。

士郎も迎撃し、槍兵の隙を突いて槍を弾き飛ばした。

相手が無手なのに気を緩めてしまったのか、私たちは槍兵の攻撃を許してしまった。

「ぐっ!!」

「がはっ!!」

槍兵に蹴り飛ばされ、私たちは土蔵の扉にたたき付けられ、扉はその衝撃で開いた。

槍兵が槍を取りに行っている間に、私たちは土蔵へ入った。

私たちはあと少しというところで追いつかれてしまった。

「なかなか楽しませて貰ったぜ。案外テーマ等みたいなのがマスタ―だったのかもな」

そう言って槍で貫こうとする。

—
—
—
—
ここで死ぬ？

— また理不尽に殺される？

—
—
—
—
—
こんなにあつけなく？

死

嫌だ。

死

———死にたくない。

死

———まだ・・・死にたくない！！

瞬間、時が止まる。

地面が輝き始め、槍兵は驚きを表にする。

「なっ?! サーヴァントの召喚だ?! ちいっ!!」 光の中から人影が姿を現す。

私はその姿を見て見惚れてしまった。

———月明かりに照らされて輝く金髪

———中性的な顔立ちだが男と認識でき

———纏う鎧は騎士を連想させる

そんな彼は確かめるように問う。

「サーヴァント・セイヴァー召喚に従い、参上した。——問おう、
貴女が私のマスターか」

この夜、私は彼と運命のような出会いをした。

プロローグ2（後書き）

〈後書き部屋〉

緋月「どうも！作者の緋月です」

セイヴァー「どうも、主人公のセイヴァーです」

紫苑「えーっと、セイヴァーのマスターの衛宮 紫苑です」

緋「いや、やっとプロローグが終わったよ」

セ「それは作者が勢いに任せて書いたからでしょう。自業自得というものです」

紫「あはは・・・、セイヴァー、オブライトにつつんで・・・」

セ「その必要はありませんシオン。作者を甘やかしては付け上がるだけですから」

緋「そんなに怒るなよ。プロローグのことまだ怒ってんのかよ」

紫「でもさすがに私も酷いと思ったよ」・

セ「ええなんですかあれば、今すぐ作者とともに私の剣で滅ぼしてしまいたい」

緋「やめて?!ここで使ったらネタバレになるからマジ勘弁して?!」

セ「だったらそうならないよう努力しなさい。この駄作者」

緋「orz」

紫「いいのかな・・・あれ」

セ「構いませんシオン。どうせすぐに復活します」

紫「そういう問題なんだ・・・」

緋「さて・・・そろそろお開きにするか」

紫「ホントに復活した・・・」

緋「セイヴァー、紫苑。合わせろよ。・・・では！」

緋・セ・紫「バイバイ！」

緋「それでも結構キズついてんだぞちくせう」

お知らせ（前書き）

お知らせです。

お知らせ

えゝみなさんにお知らせします。

つい勢いあまって投稿してしまったこの小説ですが・・・誠に申し訳ありませんがこの小説の更新を停止させていただきます。

理由は原作をいまだにプレイ中で、まだ全ルートを攻略していないため、原作設定から乖離しすぎてしまうからです。

原作を攻略し終えかつ、もう一つの小説に一区切りついたら更新を再開します。

こんな駄文ですが見て下さった方、ありがとうございました。

※ここからは文字稼ぎです。

r	a
h	j
k	t
n	m
h	t
k	p
/	g
n	t
u	j.
j	j.
a	j
d	m
c	j
u	p
p	0
j	t
v	m
z	d
c	a.
f	g
h	q
s	v
5	w
	l
	p
	h
	e
	v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4812r/>

守護の英霊の物語

2011年10月7日06時41分発行